

# 大学生における「生きづらさ」感と習慣性行動

## ～幼年期の家庭環境との関連も含めて

A98-4428 砂川 里恵 (朝倉 隆司)

### 1. 目的

本研究の目的は、家庭を離れ、社会に出る前段階にあたる大学生を対象に、日々の中で感じる「生きづらさ感」の実態と習慣性行動の関係を見ることである。幼年期を過ごした家庭環境と「生きづらさ」の感じ方の関連についてと、アダルト・チルドレンの尺度についての考察も加える。

### 2. 研究方法

- 1) 対象者：都内の短大、4年制大学に通う1～4学年、院生
- 2) 調査方法：休み時間の大学のキャンパス、授業中の教室、サークルでの集まりなどを利用し、その場で配布、回収を行った。
- 3) 調査内容：学年、性別、「生きづらさ感」、習慣性行動、アダルト・チルドレンの尺度、現在の住まいの状況、幼年期の家庭環境、家族のストローク、各因子についての質問項目を設けた。
- 4) 分析方法：SPSS10.0J (SPSS Inc.東京) を使用し、有意確率5%未満をもって有意とした。
- 5) 分析項目：
  - ・ 各項目の分布
  - ・ 各項目の男女差
  - ・ 「生きづらさ感」と習慣性行動の関係
  - ・ 「生きづらさ感」とアダルト・チルドレン尺度の関係
  - ・ 「生きづらさ感」と妖艶期の家庭の関係

### 3. 結果と考察

- 1) 各項目の分布の中に有意な偏り ( $p=0.01\sim 0.05$  以下) が認められた項目があった。項目の中には男女差が見られるものもあるといえる。
- 2) 各項目の性差の中に、有意差 ( $p=0.01\sim 0.05$  以下) が認められた項目もあった。各因子の合計

得点に有意な性差は認められなかった。項目の中には男女差が認められるものもあるといえる。「生きづらさ感」の全体としては男女差が認められなかった。

3) 「生きづらさ感」の各項目と習慣性行動の各項目感に強い相関 ( $r=0.6$  以上) を示す項目があった。「生きづらさ感」と習慣性行動の書く合計得点間にかんがりの相関 ( $r=0.4$  以上) が認められた。「生きづらさ感」と強く持つものは何らかの習慣性行動を持つ傾向があるといえる。

4) 「生きづらさ感」とアダルト・チルドレン尺度の各合計得点間に、強い相関 ( $r=0.6$  以上) が認められた。今回用いたアダルト・チルドレン尺度の信頼性が認められた。

5) 「生きづらさ感」の各項目と幼年期の家庭環境の各項目間に、強い相関 ( $r=0.6$  以上) を示す項目があった。「生きづらさ感」と幼年期の家庭環境の書く合計得点間に、かんがりの相関 ( $r=0.4$  以上) が認められた。「生きづらさ感」を強く持つものは過去の家庭環境に問題が多いといえる。

### 4. 結論

本研究では、大学生の多くが日々の生活になんらかの「生きづらさ感」を抱えており、そのことと習慣性行動の間に関連性が認められた。また、幼年期の家庭環境と現在の「生きづらさ感」の間にも関連性が認められた。

### 5. 主な参考文献

- 1) 斉藤 学 (1998) アダルト・チルドレンと家族 p24～46、90～131
- 2) A.W.シェフ (1993) 嗜癖する社会 p59、198
- 3) 大原 健次郎、宮里 勝政 (1997) アルコール・薬物の依存症 p70